

南方

思いは遙か、ルソンの山へ

茨城県 介川 勝代

一、はじめに

今年の正月、親せき一同が集まって、よもやま話の楽しい語らいの一時を過ごした。話題が、たまたま終戦で、フィリピンから日本に引き揚げてきたときのことになった。

当時、五歳であった私は、十一歳のみどり姉とたったの二人で、太平洋戦争末期における最大の激戦地であったフィリピンのマニラ市から、何も知らない日本に引き揚げてきたのであった。

姪の一人から、「ルソンの山中からどのようなようにして生き延びて、引き揚げて来ることができたの？」と聞かれた。私は、何気なくとっさに、「お父さんが、日本の家の住所を手帳の切れ端に書いて、私に渡してくれたからよ」と答えた。すると、そばにいた七十四歳になる兄が、「そうではないよ、その紙切れは私が書いて渡したのだよ」と、一言ぼつりと言った。私は一瞬、ぎくりとして次の言葉が出なかった。

引き揚げてきてから五十余年の間、兄は一言も戦争中のことを話したことがなかったが、その兄の口から出た言葉に私は、五十余年前のあのルソンの山奥のこと、走馬灯の如くにまざまざと記憶の奥からよみがえってきた。

ルソンの山奥深く逃避行を続けていた、母と私たち

きょうだい四人が、偶然に兄と出会った。母が兄に、「お父さんや進一が死んでしまった」と、二人の死を告げた。兄は、「一家全員で自決しよう」と言って、手榴弾を私たちに渡した。兄は、手榴弾を渡すと、それ以外のことは何も言わずに、敗戦の日本軍が立てこもっている方に走って行ってしまった。その時の有様が頭の中に広がってきた。しかし、その時に、とっさに手帳を出して、日本での帰り着くところを走り書きして渡してくれたことは、全然思い出せなかった。というより知らなかった。

あのルソンの山奥での極限の状態の時に、とっさに一家の自決を促したものの、幼い妹や弟たちを見て、ふっと哀れみを抱き、「たとえどんなことになっても、一人でも何とか生き残って、日本に帰ってもらいたい」と、気を取り直して帰る場所を走り書きして渡してくれたのであろう。五十余年の間、兄の心の奥深くしまわれていたことだったのである。

後年、引揚者の親睦の集まりである「マニラ会」に出席したときのこと。皆さんの話の中で、収容所や引

揚船の中で五歳の私が、大きな声を出して一生懸命に、「福井県足羽郡上文殊村西袋」と、繰り返し繰り返し言っていた姿が忘れられない、今でも思い出すよ、と言われた。

悲惨な離別、筆舌に尽くし難い苦難を乗り越えて日本に帰った。生き残りのきょうだい四人は、ルソンの土となった父、母、兄弟たちの目に見えない庇護を受けて、それぞれに再起を果たして、平和で幸福な人生を送ることができた。

平和の尊さ、有り難さをしみじみと感じながら、二度とあのような悲劇を起こさないように祈りつつ毎日暮らしている。

二、私の生い立ち

私は、昭和十五（一九四〇）年二月五日、当時のフィリピン国首都のマニラ市サンバロク区レテン街において、前田慎次、ハルヲの六番目の子として生まれた。父は、福井県で昔から製材を家業としていた家の次男だったので、十代の終わりに新天地を求めて、このフィリピンに渡り、苦勞を重ねながら努力精進して

小さいながらも独立した建設会社を興した。母と結婚し、次々と子宝にも恵まれて、大きな家に使用人も数人置くようになり、最新型の自動車を乗り回すほどになっていた。

私が生まれた翌年には、弟、進一が生まれたので、きょうだいは七人となった。当時でも、きょうだいの多い方であった。しかしながら私は、生まれつき体が弱かったので、近所にいた松本というおばさんに世話になりながら育った。

昭和十七年一月には、日本軍がルソン島のリンガエ湾に上陸して、マニラは日本軍の占領下におかれた。私たち子供は、初めて見る日本軍に感激して、日の丸の小旗を振って歓迎した。私の家は大きな二階家であったので、日本の兵隊さんたちがいつも遊びに来ていてにぎやかだった。歌が好きだった私は、兵隊さんから日本の歌を教えてもらい、意味も分からずに大きな声を張り上げて歌っていたものだった。また、それが兵隊さんたちに受けて、大変にかわいがってもらっていた。

今、考えてみれば、そのころ日本軍は市内に溢れるように駐屯していたので、休みの時には日本人の家などで足腰を伸ばし、故郷の家に帰ったような気分になっていたのだろう。私はまだ小さかったので、世の中の動きや大人たちの話は何も理解できずに、ただ遊んでもらえることが嬉しかった。兄や姉や、その友達と一緒にあって、「戦争ごっこ」の遊びもしていたことが思い出される。

毎日、家の裏の「ジジタカ」にある甘藷畑の中に入って、体中に芋の茎を巻きつけては、「インディアンバーナ、カカナカナ」などと歌いながら踊っていたり、また、バナナの葉や芯で、刀や鉄砲をつくって撃ち合うまねなどもしていた。瓶のふたを集めては、洋服の胸や襟に付けて「勲章だ、勲章だ」と騒いでいたこともあった。

裏山のマンゴーの木には、「サラグーバン」といって、日本名で言えば「大きなカナブン」がたくさん住みついていて、木を揺さぶると、ポタポタと音をたてて落ちてきた。それを拾って背中と背中をチューイン

ガムでくつつけて、どっちが先に起き上がるかと競い合わせたりした。姉たちは、楽しそうに学校に行っていたので、午前中は、まだ幼い弟の進一と二人で遊んでいた。

みどり姉は、体格が良くて運動の好きなスポーツ少女だった。マニラ市内で最大のリサール球場で、マニラ在住の日本人が集まって盛大な運動会があったが、それにも参加した。

重箱に入った母の手作りの弁当を、家族一緒においしく食べたことも思い出の一つである。

昭和十八年の秋までは、家族がそろって平和で楽しく心豊かに暮らしていて、本当に幸福そのものの家族だった。

三、疎開帰国の不首尾

大東亜戦争も、開戦当初の勢いは段々と薄れてきて、マニラ市内もアメリカ軍の爆撃を受けるようになって、落ち着かなくなってきた。この情勢ではいつアメリカ軍がフィリピンに上陸をして、再びマニラも戦場となるだろうと、在住の日本人の間では、噂とな

り人心も動揺していた。

我が家でも、父を中心にして話し合いがあり、結局、母が姉二人とすぐ上の兄、弟、そして私の五人の子供を連れて日本に疎開帰国することとなった。父と二人の兄は、このままマニラに残ることとなった。主な家財道具も船に積み込んだ。

昭和十九年の晩秋夜に、マニラ港から出港する貨物船に乗り込んだ。しかし、出港してすぐに空襲があって乗船していた船も爆撃されて、動けなくなった。もちろん日本に持って帰ろうとした家財道具も、ほとんど水没してしまった。私たちはようやく救助されて、そのまままた、家に舞い戻った。体の大きなどっしりとしていた父だったが、そのときは、家から裸足のまま飛び出してきて、「良かった！ 良かった！」と言いながら大声を出して泣きながら、私たちを次々と抱きしめてくれた。父は、私たちが船もろ共沈んでしまったのではないかと思っていたところに戻ってきたので、我を忘れて飛び出してきたのだ。いつにもないことだった。もともと父は、肝っ玉の太い人だった

が、このときばかりは本当に心配したのだろう。

日本に疎開することは失敗したが、家族は再びそろって生活できるようになった。このとき無事に日本に帰っていれば、父が実家に送っていた五千元という大金で、親は安心して暮らしていける計算だった。

五千元という金額は、当時ではそれほどの大金だったのだ。

戦後しばらくたってから、このことを書いた手紙を、父の形見として伯父から受け取って初めて、父の配慮を知ることができたが、肝心の五千元の行方は教えてもらえず、まったくの行方不明となってしまうた。

それからのマニラの家での生活は大変だった。一番に困ったことは、各部屋に備え付けていた扇風機を回すと、「ゴォーッ」という大きな回転音がするので、兵隊さんから、「敵機の来襲があっても、こっちの音が大きくて、飛行機の音に気付かない」といって怒鳴られたので、それからは扇風機を回すこともできずに、みんな暑いのを我慢して生活していたことであ

る。しかし、後になってみるとそんな苦しさは、ルソン北部の山奥で体験した苦しみからみれば、全く比較にならないものであった。それ以外でも、日常の生活は日に日に窮屈になってきて、先行きに不安を感じるようになっていた。

四、長兄の思い出

大正十二年（一九二三）九月生まれの長兄、一志と、大正十四年一月生まれの次兄、幸四郎は、共に父の故郷の福井で学生生活を終えており、マニラに戻ってきたときはもう、立派な社会人扱いであった。

当時の学校教育のしからしめるところで、軍国主義の固まりのように意気の強い兄たちだった。私が、現地のフィリピン人の友だちと、「ペンペンデサラベン……。カラバウバットウテン」などとタガログ語で歌を歌って遊んでいると、「こらっ！ 日本語を使え！」と、怒鳴られたものだった。兄とはいえ、十八歳も十六歳も歳が違うと、兄弟というよりも、よそのおじさんという感じが強かったので、ちょっと大きな声を出して怒られると、怖くなってしまった。

昭和十九年三月、恐れていたことが現実のこととなっていました。マッカーサーの率いる連合軍がマニラ湾北部から、怒濤の如き勢いをもって上陸して、このマニラ市内においても凄まじい市街戦が始まったのだ。

長兄は、「女や子供たちは、我々市街で戦う者の足手まといで邪魔になるから、山に逃げる」と、母に強く言っていた。母はその言葉に反論して、「こうなったら家族一緒に、アメリカの弾に当たって死んだ方がいい」と言った。母の本心は、父や兄たちと一緒にこのマニラに踏みとどまりたかったのであった。さらに兄は追い打ちをかけるように、「戦いの邪魔をするやつは、国賊だ」と、強い口調で私たちに向かって言っていた。

母は、致し方なく他の在留邦人の家族たちと一緒にあって、ルソン北部の山奥に向かってマニラを去ることにした。長兄の意志とは、このときが今生の別れとなっていました。そのときは、またすぐに会えるものと思つて、感情的にはあまり気にも掛けずに、しばし

の別れぐらゐの気持ちだった。

長兄はまだ、軍隊に召集にはなっていないかったが、人一倍に愛国心の強い人だったので、「自分がやらなければ」という気持ちで常日ごろから持っていた人だったので、その後は日本軍と一緒に行動していて、市街戦では銃を持って戦っていたと、その様子を見た人が後になって私たちに話をしてくれた。私たちが引き揚げてから、役場には行方不明として届けたが、今ではマニラでの市街戦が最も激しかった、昭和二十年三月十五日を長兄の戦死の命日として回向している。父の実家に残っている長兄の写真を見るたびに、その顔立ちが私の長男にそっくりであることに因縁を感じている。青春時代を戦争と共に過ごし、せっかくこの世に生を受けてきたのに、何の楽しみも経験することなく死んでいった長兄の写真を見るたびに、涙が溢れ、あのマニラでの戦いの無意味さに、はらわたが煮えくり返るような気持ちになつてくる。

五、叔父の思い出

昭和十九年の春、清叔父が現地召集を受けて兵隊に

行った。この清叔父は父の末弟で、父を頼ってマニラに来て、父の仕事を手伝っていた。出征する日の朝、父をはじめ私たちの家族や会社の人々、そして近所の人たちなど大勢で見送りをしているのに、叔母は家から出てこなかった。「なぜ見送りをしないのか」と、不思議に思っていたが、七歳と五歳と三歳の三人のかわいい盛りの子供を残されて叔母は、悲しみの余り夫を見送る気持ちになれなかったのだらうと、後で母は言っていた。にぎやかに見送る人々とは反対に、家族にとってはどんなにつらくて悲しいことだったらうと、今になって叔母の気持ちが痛いほど分かってきた。そして叔父も、必死になって涙をこらえて見送りの人々に対応していたが、いよいよ出発となり「万歳、万歳」の歓呼の声の下を通り過ぎる叔父は、一度も後ろを振り返らなかつた。その姿は、私も忘れることができない。

夫婦や子供たちにとっては、ここでの別れが永遠の別れになってしまった。叔父は九死に一生を得て無事に復員して福井に帰ってきたが、母親と子供たち三人

は、ルソンの山奥で死んでしまった。復員してきた叔父から、「家族は、どんな様子で死んだのか」とか、「子供たちを助けることはできなかったのか」などと、何回も何回も問われたが、ルソン島の山奥のジャングルの中で離ればなれになっていて、捜すこともできずにいたし、ましてや最期の様子などは分からないので、答えることもできずに、全く切ない思いをしたものだった。

六、マニラ脱出

戦況がだんだんと不利になってきた昭和十九年十二月、在留邦人に対して、マニラからの強制疎開が指示されて北部ルソンの山奥に避難することになった。父と兄二人はマニラ防衛隊の一員となって残留することになった。逃避行は、母と十六歳の長姉美重子、十二歳の次姉みどり、八歳の兄次一、三歳になった末弟の進一、そして四歳の私の六人家族であった。私は四歳になっていったが、マニラを脱出してからの行動については断片的な記憶しか頭の中に残っていない。随分いろいろな苦勞をして、悲惨な極みであったことははっきり

りと覚えているが、毎日どのようにして過ごしていたのかはよく思い出せない。次姉のみどりは比較的によく覚えていて、帰国してからもいろいろと当時のことを話してくれていたので、みどり姉の記憶を頼りにして書きつづる。

マニラからルソン島北部の山奥に足を踏み入れた当初は、私たちが来ることを知って一足先に逃げ出した山岳イゴロット族の住んでいた小屋を見付けては、そこに潜り込んで夜は寝ていたので、雨露をしのぐこともできて、体力の消耗を最小限におさえることができた。しかし、困ったのは食べ物であった。マニラを出るときは多少の食糧品は持っていたが、各人が携行できる量は知れたもので、すぐに食べてしまつて数日するとほとんど無くなつてしまつた。

野生のサツマイモ畑を見付けたが、先に歩いている人たちに全部掘りつくされてしまい、私たちがそこにいったときには、葉とつるばかりしか残っていないなかつた。それでもあればよい方で、むさぼるように食べたが、あまりおなかはふくれなかつた。

昼間は、山の中にいてもちよつと動くときに米軍の飛行機が飛んできて銃撃を加えたり、ときには爆弾を落したりするので動くことができなかった。うつそうとした密林の中で静かに休んでいるはかなかつた。夕方になって辺り一面が薄暗くなつてくるとスコールがやつてきた。

その中を、みどり姉は進一を背負い私の手を引いて、よろよろしながら、ぬかっている山道を奥へ奥へと逃げて行つた。スコールの最中には、多少声を出したり動いたりしても敵機も飛んで来ないので安心であつた。

そんな状態が続いていたある日、「おいっ！ 背中の赤ん坊の様子がおかしいぞ、死んでいるのではないか！」と、わきを通っていた男の人が、みどり姉に声を掛けた。私もびつくりして姉の背中を見たが、眠っているようでもあつたので、あまり気にしなかつた。それよりも、そこでちよつとでも他の人と別の行動をとっていると、おいてきほりをくつてしまうので、背中から進一を下ろして様子を見ることもためらつてし

まい、そのまま歩き続けた。ようやく夜が明けたので休むことになり、姉は背中から進一を下ろしたが、本当に死んでいた。眠っているようなかっこうだが、息はしていなかった。姉と私は、びっくりして涙も泣き声も出なかった。

母と姉たちは、その辺りに落ちている木の枝で穴を掘り、進一をそのまま埋めてしまった。「死んでいるのではないか？」と途中で言われても、その場で下ろさずにここまで連れてきてよかったと、つくづく思った。途中で下ろして、そのときに本当に死んでいることが分かったら、道の傍らにそのまま置き去りにして来るほか仕方がなかったろうと思い、ここでせめて穴を掘って埋葬し、安らかに眠らせることができたことは、せめてもの慰めであった。

母は、「もう、ここからは動かない。私はここで死んでもいい」と、言って泣くばかりだった。姉たちは、母を説得してようやく腰を上げ歩くこととした。母は、私の手を引いて歩いた。

日本に帰ってから、進一の死んだ日は、昭和二十年

六月二十五日として届けた。

七、父との再会と死

毎日、毎日、昼間は密林の中で休み、夜になると島の北部を目指して歩き通した。疲労困ばいしていたが、それでも歩かなければ致し方なかった。山の中で一番難儀したのは、蚊の大军に襲われることだった。その結果、フィリピンの風土病であるマラリアにかかる人が、次から次と出てきた。マラリアにかかる人と高熱が出てうなされ、水が欲しくなってくる。周りの人も見るに見兼ねて、ついそこいら辺りの水たまりから泥水をすくってきて飲ませる。するとすぐに下痢をしてしまうので、また、水が欲しくなるという悪循環をたどって、ついには死が訪れる。そんな人がたくさんいた。食べ物もなくなってきたのでやせ衰えて餓死してしまう人も多かった。

そんなときには、思い出すことは食べ物のことばかりだった。マニラでの一家がそろって幸福なだんらんの夕食のことや、父に連れられて行った中国料理店や、モンゴ屋でおいしい物を腹いっぱい食べたこと

であった。姉たちと、そんなことを話し合っていると、大声をあげて泣き出してしまった。

そんなある日の夜のこと、サンホセで軍属として現地召集されていた父が、私たち家族を捜し求めてこの山奥にまで来たのだった。大声をあげながら、「美重子！ 美重子！」と、長姉の名前を叫びながらこっちに向かってきた。その声を聞き私たちは、真っ暗やみの中を声のする方に向かって夢中で走り回ってやっと父の姿を見付けた。

しかし、父の姿を目の当たりにした私たちははく然とした。体格の良かった父の面影は全くなく、極端に言えば幽霊に近いような姿だった。一本の棒切れにすがりながら、よたよたとして歩いてきた。相撲取りのように腹の出た人だったが、今は全く、やせ衰えた姿かっこうだった。四十五歳で徴用された父は、毎日どんな生活をしていただろうか。母と私たちの間に横たわった父は、胸が苦しいような様子だったが、藁などは何もないので、木を燃やして「消し炭」を作りそれを食べさせた。父は、それを喜んで食べて口の周り

を真っ黒にして、生まれ故郷の古里のことを、うわごとのように私たちに話していた。そのうちにだんだんと声が小さくなり、息遣いも苦しくなってきたようだった。そのままのかっこうで死んでしまった。私たちは、父の体にすがって泣くばかりだった。

私たちの周りには、ここまでたどり着いて死んでいた人々の遺体がごろごろところがっていて、中にはもう白骨化したものもあった。家族全員が亡くなってしまったような家もあった。

父の遺体は、進一のときと同じように密林の中に穴を掘って埋葬した。ここは、バクダンという地名だったようで、昭和二十年七月二十二日に父死亡として、後日届けを出した。

八、山中での生活

私たちは、何でもよいから食べられる物をと、探し求めて山中を歩いていた。あるとき軍服、軍帽姿の兵隊さんが、鉄兜の中に米を入れてついていた。「兵隊さん！」と、声を掛けても聞こえないのか、そのままで振り向きもせず米をついている。びくつともしな

いので、そっと近づくと「ばさっ」という音を立てて倒れてしまった。着ている軍服の中は、骸骨であった。髪の毛は腐らないので後ろから見ると、全く生きている人と変わらないのだった。このときほど恐ろしいと思ったことはなかった。

みどり姉は、鉄兜の中にあつた米を持っていた布ぎれに包んで、母のところに戻った。そばにいた辻さん夫婦と一緒に、この米を炊いて久しぶりに、米のご飯を食べた。

ここには一般邦人だけでなく、兵隊さんもたくさんいたが、マラリアにかかって動けない兵隊さんや、負傷しても手当ができない兵隊さんが多く、うめいていた。暑いところなので動けなくなると、すぐに傷口や、水気のある目、口、鼻に蠅がたかり蛆虫がわいてくる。そしてそのままにしているうちに三、四日たつと骸骨になってしまう。まったく人間の体など、ほかにもいものであった。今、思い出してもぞっとして涙が先に出てしまうが、そのときにはあまりそんな感情は湧いてこなかった。

山中を流れている小川には、上流から流れてくる川水に蛆虫が固まっつてうごめいていたが、水を求める人は、そんなことには構わずに顔をつけて飲んでいたが、そのうちに息が絶えてしまう人も多かった。

しかし私たちは、ただただお腹がすいていて、何でもよいかから食べられる物を探し求めて歩いていたので、目の前の悲惨な光景にもあまり感情を表すこともなく、うつろな目で見ていたようだった。

ある日、例のとおり、サツマイモを探しに出掛けたが、ほとんど掘りつくされていて見付けることができなかった。あきらめて戻りかかったとき、ふと見ると掘り返された土の間から、小指ほどの大きさの芋が顔を出していた。夢中になってその辺りを掘り起こすと、親子五人が食べられるには十分な量がとれたので、喜び勇んで帰り、家族みんなで生のままかじり久しぶりにお腹の中に食べ物が入ったような感じになったことがあった。

アメリカ軍は、マニラからだんだんとルソン北部に攻め込んできたのか、私たちのいる所の背後まで近づ

いてきたようだった。大砲の弾が頭の上を鈍い音を発しながら飛んでいた。しばらくすると前の方で、「ズドン！」と激しい音を出して地を揺すっていた。これも安全ではなくなってきたので、さらに奥地に逃げのびなければと相談があった。

このころになると、さすが気丈な母も衰弱がひどくなりほとんど歩けなくなってきた。ほんのわずかな二、三センチメートルぐらいの段差の所でも、足が上がらなくなりつまずくようになった。つまずくと悲しそうな顔で、手を振って、私たちに早くみんなについて行くように合図をした。あの姿は、今になっても忘れない、否、私は死ぬまで忘れられないと思っ

る。そんなことを繰り返していたとき、突然、先を進んで行った人たちが、真っ黒な姿で戻ってきた。中には焼けただれて苦しさに、泣きわめき、もだえている人もいた。集団で奥地に向かっていたところを目掛けて砲撃してきたらしく、大部分の人がそこで死んでしまったようだ。生き残った人の話では、「新型の石油

爆弾」ではないかと言っていた。私たちの家族は、行動が自由にならない母を守りながら歩いていたので、集団の主力から取り残されていたので、助かったのだ。

九、母の死

もう食べる物は何も残っていなかった。空腹に耐えかねて、動く体力も気力もなく、母子五人は、死んだようになつて地面に横たわっている毎日となった。うつろな目をして真っ青に晴れ渡った真夏の空を何気なく見ていたら、アメリカの飛行機が一機で、ゆっくりと飛んできた。今までならすぐに「敵襲！」という号令で身を隠したが、今はそんな気力もなく、ただ、その飛行機の飛んでいる方を見ただけだった。しかし、その飛行機は、いつもと違って低空から銃撃することもしなかった。どうしてかと訝しく思ったがあまり気にもしないでそのまま見ていた。すると、ピラをまき始めていた。青い空一面に白い紙片が、きらきらと落ちてくるさまは今まで見たこともない幻想的な情景だった。

私たちの近くに落ちてきた一枚のビラを見て、日本が負けたことを知った。そういえばここ数日、大砲の音も聞こえず、飛行機からの爆撃もないことを思い出した。それぐらいものを思い考える力も失っていたのだらう。戦争の終わったことをビラを見て知ったが、それでも母は、息を引き取る最期の最期まで、「日本は必ず勝つ」と信じていた。「国に帰ったならば、まず一番にお赤飯と柿と、そして栗を食べたい」と、口癖のように言っていた。敗戦のビラを見て、「ええっ！」と言ったまま後は何も言葉が出ずに、ただ、泣き続けた。母のあのときの姿がまぶたに焼きついていて離れない。夜になっても泣いていた。

翌朝、母は、私たちが目覚めたときには、大きく見開いた両眼に涙をいっぱいにためたまま息を引き取っていた。かわいそうな母、優しかった母、父を愛していた母、七人の子供をひたすら育てた母、全力で幼い私たちを守ってくれた母、そんな母も、日本の敗戦を知って生きる気力がなくなったのだらうと思い、悲しくて悲しくてたまらなくなった。父や進一のときと同

じように、木の枝で掘り始めたが土が固くてなかなか掘れずに難儀をした。涙と汗で、くちやくちやになりながら掘り続けた。やっと埋められるほどの深さになったので、母を静かに横たえて、その上に草や小枝などを拾ってきて遺体を覆った。これが母との永遠の別れであった。

私たちがきょうだいは、ルソン島の山奥で孤児となつてしまったのだった。母の死によってますます衰弱して、ただ泣くばかりの長姉、じっとして座ったまま動こうともしない次一兄、そのそばでみどり姉と私は、何を考えることもなく、虚脱状態でいた。全く生気のない山中で、深々とせまり来る暗黒の中にいるときの気持ちは、何と表現してよいか分からず、ただ、背筋に冷たいものが走るような有様だった。

母の命日は、昭和二十年八月十九日とし、死亡地は、ルソン島タマノエ地区として後日役場に届けた。

翌日、アメリカの飛行機から落下傘が落とされた。

姉は、「マニラにいたときには、アメリカ人の子供と毎日顔を合わせていたので、恐いという気持ちは全然

もっていない」ということで、何か食べられる物がな
いか探しに出た。ポロポロになっている布切れを持
ち、山の中からアメリカ兵の声がする方に行った。

布切れを広げて待っていると、何人かのアメリカ兵
が近づいてきて笑いながら、缶詰や、パンや、飲物な
どを投げ入れてくれたそうだ。動けないでいる長姉
や、兄に何か食べさせなくてはという気持ちでいっば
いだったとのことだった。それから毎日、アメリカ兵
のいる所に行つて食べ物をもらつてきた。今に思えば
ほんとうに惨めなことだった。

十、山を下りる

戦争は終わったのだから一日も早くマニラの家に戻
りたいと、そればかり願っていたが、父も、母も、弟
も死んでしまい、それにマニラで生き別れた兄たちが
どうしているのかも分からず、気持ちが落ち着かな
かった。しばらくすると、山の中で、「戦争は終わっ
たぞ、山を下りろ」と叫んでいる。だが、動けない姉
や、弟を連れてどうやってここから下りるのかと悩ん
でいた。そのうちに、アメリカ兵と日本兵、五、六人

が来て寝ている美重子姉を担架に乗せて連れて行つ
た。足をけがしている兄は、日本兵が背負ってくれ
た。みどり姉は、私の手をひっぱってよろよろしなが
ら、兵隊さんの後について山を下りた。

イシン河の岸にたどり着いたときには既に、大勢の
日本兵や在留邦人が集まっていた。雨季で増水した河
は激流となつていて、五歳の私にとっては、ここを渡
ることは命懸けのことだった。姉の手を力いっぱい
ぎりしめていた。体格のよい姉は、流れに押されなが
ら私の手を引っ張つて、ようやく対岸に着くことがで
きた。ほつとして休んでいると、「前田さん、前田さ
ん」と、呼んでいる人がいた。何だろうと思ひ手を上
げると、兄を背負つて下山してくれた日本兵がきて、
姉に向かつて、「弟さんが死んだ、ちゃんと埋めてき
た」と言つて、涙を流しながら両手をついて謝つた。
私たちには、次一兄が死んだと言われても、とても信
じられなかった。しかし大の男一人でも、山を下りて
くるのは大変なことだったので、八歳のけがをしてい
る子を背負つて山を下りることは、大変に無理があつ

たのだろうと、後にはあきらめの気持ちになった。

姉は、「父も、母も、弟も自分の目で確かめて埋めてきたのに、次一の死は、自分の目で確かめられたわけではないので、何だか余計にかわいそうで、泣けてしまった」と言っていた。その話を聞くと胸がしめつけられる思いがする。さらに、「五歳の妹と一緒に連れてきたのだから、八歳の弟も私がもう少し頑張つて、両手に引っ張ってくればよかった」と悔しがっていた。だが、けがをしていた兄を連れては、到底、不可能であつたと思う。

もし、向こう岸に置き去りにされていたのだとすれば、性格の優しいイゴロット族に救われて、今でもどこかに生きているだろうと思うこともある。死んだ姿を見ていないのだから、私たちの心の中では、元氣な姿で生き続けているのである。

十一、日本への帰国

ようやくマニラに戻ることができたが、我が家に帰るのではなく収容所に入れられた。美重子姉は、どこに連れて行かれたのか消息不明となり、捜す手段もな

かった。姉妹二人の孤児となった。

昭和二十年十月の終わりごろに、日本への帰国が決まり、マニラ港の大きな船が止まっている所に並び、乗船を待っていた。

アメリカ兵が、二人の名前を変なアクセントをつけて呼びあげた。その瞬間、ほっとすると同時に、生まれ育った故郷マニラを去ることの悲しさ、そして、いまだ見ぬ父の故郷への不安などが錯綜して足が重かった。一年前には、父母を中心にして兄弟七人の計九人のにぎやかで幸福な家族だったのに、一年後の今日は、姉妹二人の寂しい家族となり、言い知れぬ思いが万感胸にせまり、涙をこぼれ落としながらタラップを登った。フィリピンからは、何一つ持って帰れなかった。ただ、父と母の遺髪と遺爪いづまをしっかりとくるんだぼろ布が、ただ一つの物だった。船が動き出すと、だれからともなく歌い出した。

「さらばマニラよ。また、来るまでは

しばし別れの涙がにじむ

恋し、比島の島々見れば

椰子の葉影に、十字星」

だんだんと離れていくマニラの景色に向かつて、ちぎれるように手を振っている人、甲板から身を乗り出すようにしてマニラを見つめ続けている人、それぞれ人の思いはいろいろだろうが、みんな泣いていた。

頑張って日本に帰りさえすれば、二人の兄も、姉もきつと帰ってくる。それまではどんなに苦しいことがあっても、姉妹二人で生きていかなければと覚悟を決めていた。

船の中では、船酔いに困ったが、私はとても元気で好きな歌を歌っていた。日本に着く前夜の演芸会では、舞台上立って歌い、菓子などをもらってきた。船の中は、ほとんど大人であったので、みんなにかわいがられていた。引き揚げてからの苦労などは全然知るよしもなかった。十一月の初め、生まれて初めて日本の土を踏んだ。着いたのは鹿児島港であったが、ぼろぼろの夏服では寒くて寒くてたまらなかった。後で考えてみると、鹿児島は日本では一番南にあるので暖かはずなのに、マニラから来たせいも、着ている物の

せいも、どちらかだろうが、本当に寒かった。靴もなぐはだしだった。引揚者収容所で軍服の上着をもらい、それを着たがそれでも寒かった。とにかく、父の郷里の福井に行くことだけを考えていた。

下関から乗せられた汽車は、無蓋車だったので、姉妹二人体を寄せ合って暖をとる暇もなかった。「お尻！ 死んでいるのか？」とけとばされて、びっくりして飛び起きたこともあった。汽車が止まったとき、ホームでたき火をしていたのを見付けて、暖まりに行ったが、そこで着ていた軍服の裾に火がうつり燃え出して、消すのに大変だったこともあった。広島辺りで降りる人も多く車中はだんだんとすいてきた。米原までは、山梨に帰る松木さん姉妹と一緒にだったが、私たちは北陸本線に乗り換えるので下車した。そのとき思わぬ出来事があった。姉の話で、「松木さんに教えられた汽車に乗り換えてほっとしたら、後からついてくるはずの妹がいない。はっとして周りを見ると、妹がホームにいて、「わあ！ わあ！」と泣いているのが目に入った。私はびっくりしてすし詰め乗客を

かき分けて降りようとしたが、汽車は動き始めてしまった。私も泣きながら妹の名を呼び続けていると、その様子から事情を察してくれた周りの人たちが、窓をいっぱいに向けて私を車外に飛び下ろさせてくれた。もうそこはホームから離れている土の上だったの
で、運動が得意だった私はけがもせず、すぐに泣いている妹の所に行った」。

危機一髪のところであった。二人で泣き続けていると、女の人が寄ってきて、「かわいそうに、おあしはあるのかえ?」と聞かれたので私は、軍服の裾を持ち上げて、「足はついている」と言つて足を見せた。マニラの山中や収容所でも、足の無い人を何人も見っていたので、私たちに足があるのかと聞かれたと思つた。お金のことを、「おあし」と言うなんて知る由もなかった。その女の人は、「おまんじゅう」や「おにぎり」をくれたという、出来事だった。

父の故郷は、大土呂駅で降りるのだが、間違えて福井駅で降りてしまった。駅長さんが、「昨日も、フィリピンから引き揚げてきたという姉妹二人が、ここで

降りたよ」と言った。その夜は、駅に泊めてくれた。その姉弟というのは、一緒に引揚船に乗って帰つてきた田中さんのことだった。

翌朝、やつとの思いで父の生家にたどり着いた。祖母も、伯父、伯母も、いとこたちも、村の人々もどんなに驚いたことだろう。ポロをまとつた、やせ細つてろくに歩くこともできない女の子二人が現れたのだから、さぞかしだつたと思う。以前に父が、私たちがよくだいの写真を送つてあつたので、祖母はすぐに孫だと分かつたそうだ。

父母の形見を見せると、伯父は、「わあっ!」と泣き伏した。私たちもほつと安心した。姉は、マラリアが再発してしばらく高熱が続き床に伏した。私は、生まれ初めて見る雪に驚き恐れて縮こまっていた。

翌年、消息が分からなかつた美重子姉が、丸々と太つて帰国した。アメリカ軍の病院で手厚い治療を受けて命を助けられたとのことである。続いて、マニラ市から避難する際に別れた、次兄の幸四郎も帰国してきた。七人きょうだいのうち、四人が日本の土を踏む

ことができた。長兄はどうしたのか、とうとう消息がなかった。

しかし、戦後の生活も、いつまでもきょうだい一緒に暮らすことはできなかった。幸四郎兄は、東京の叔父を頼って上京、働くこととなり、美重子姉も、大阪の伯母のところへ世話になることになった。福井には、また、みどり姉と私の二人が残ってしまった。そのうちに、みどり姉は、母の実家に世話になることとなった。結局、きょうだい四人は再び別れ別れになってしまった。

十二、回想

昭和二十五年四月、東京で働いていた兄が、青山に一軒家を借りてまず、私を呼び寄せてくれた。次いでみどり姉も上京し、そのうちに大阪の美重子姉も来て、再びきょうだい一緒に生活をするようになり、短い期間だったが楽しい日々を送った。

何といっても、あのルソン島の山奥での逃避行から、引き揚げて福井に来てそこから再出発をして、今日の幸を得たのはきょうだい、特にみどり姉のおかげ

であると感謝している。みどり姉がいなかったら、私はどうなっていたか分からない。

伯父の家は大家族であったので、苦しみの連続であった。伯父の長女が実家でお産をしたので、その赤ん坊の世話を私がしていた。小学校一年生になっても、冷たい川の水でおむつ洗いをしていた。ご飯を食べべていても、赤ん坊が泣き出すとすぐに、おむつを取り替えて、川に行つて洗うのだった。そこいら辺りに置いておくと怒られてしまった。私の成長も遅く、入学のときは八十センチメートルぐらいしかなく、背の高い同級生とは頭一つ以上の差があった。しかし、学校は楽しくて、学校にいる間だけは家のことを忘れていた。そこには、戦前に父が寄贈した柱時計が各教室にあり「前田慎次」と名前が入っていて、どの教室にいても父を感じていたからだ。

平成六年一月に、兄から一通の便りが届いた。それは、父母兄弟の五十回忌の法要を行うという知らせであった。私は、驚いて何度となく読み返した。その文面には、「法事とはいえ、みんなが幸せて元気で暮ら

せることの喜びを……」とあつた。

当日、川越市のセレモニーホールの祭壇に飾られていた写真は、父母と、二人の兄の四枚だった。三歳で死んだ弟の写真はなかった。九歳だった次一兄の写真は、よだれ掛けをした赤ん坊時代のものだった。フィリピンからは、一枚の写真も持ち帰れなかったので致し方なかった。法要の間、写真を見つめながら、私は声をあげて泣き通しだった。

父も、母も、兄も、そして弟も、あの戦争さえなかったならば、それぞれに、もっともっと幸せな人生を送れたはずなのにと思うと、哀れでたまらなかった。

肩の荷をおろして、ほっとしたような兄の後ろ姿を見ていると、また、涙が込み上げてくるのだった。

生き残った兄、姉、そして私、みんなそれぞれに元気で、平和で、幸福な家族を築きあげている、現在に感謝するとき、思いは遙かにルソンの山に馳せるのだった。そして、過ぎ去った五十余年を、慈しみのペールで大切に覆い包みたいものと、思う毎日であ

る。